

「きみのお金は誰のため」

田内学 2023/10/18発売

<きっかけ>

- 相変わらず読売新聞の週一連載の「あすへの考」で、田内教授に興味持つ
- 読者が選ぶビジネス書グランプリ2024 総合グランプリ「第1位」受賞
- ゴールドマンサックスの元金融トレーダーから転身し、作家・金融教育家へ

<あらすじ>

- 小説風な作り。高校生の「僕」と道で出会った「お姉さん」が、資産家風の「おじいさん」からお金の話を教わる話

<感想>

- 久々にビジネス本で、最後にうるうるキター！（最近はシンプルな話に感動する自分がいる）
- 働くことの意味を改めて考えて、働き続けることは良いことだ、と改めて気付いた。

<琴線ワード>

- 次ページへ

- 1. お金自体には価値がない。2. お金で解決できる問題はない。3. みんなでお金を貯めても意味がない。
- 逆に言うとな、選べないとお金は力を失うんや。教育に力を入れようと国が予算を増やしても、学校の先生がおらんかったら何もでけへん。お金がえらそうにできるのは、働いてくれる人から選べるときだけや。災害が起きて働ける人が減ると、お金の無力さに気づくやろ。
- ハイパーインフレで失敗する国は、生産力の不足をお金という紙切れで穴埋めできると勘違いした国やで。
- 問題なのは、「社会が悪い」と思うことや。社会という悪の組織のせいにして、自分がその社会を作っていることを忘れていることが、いちばんタチが悪い。
- 借金をして、破綻した国もあれば、破綻しなかった国もある。2つの国を分けるのは、そのお金で誰に働いてもらったかということや。破綻した国は、国の中の人たちが働かなかった。家の借金と同じで、外側にいる人に頼りすぎたんや。
- 世界は贈与でできているんや。自分から他人、他人から自分への贈与であり、過去から現在、現在から未来へと続く贈与なんや。その結果、僕らは支え合って生きていけるし、よりよい未来を作れる。それを補っているのがお金やと僕は位置付けている。
- ずっと違和感があったのよ。女性の労働参加とか、共働きって言い方をするけどさ、家事や育児をしている主婦は遊んでいるわけじゃないのよね。（by七海）
- その働く行為に、お金が絡むかどうかは本質的には関係ない。1人ひとりが誰かの問題を解決しているから、僕らの社会は成り立っている。何度も言うように、お金が社会を支えているわけやない。
- 愛する人を守ろうと思うと、社会が他人事でなくなる。
- フリードマン：「この鉛筆を作れる人は世界に1人もいない」 僕が好きなのはこの後の話や。同じ言語を話さない人、異なる宗教を信仰する人、出会ったら憎しみ合うかもしれない人が協力して作っている。お金を使った経済によって、人々の間に調和と平和が促進されていると彼は言っているんや。